

後の矢をあてにしてはならない

「始めよければ終わりよし」「一年の計は元旦にあり」などという言葉を見てわかるように、ものごとの始めが大切だという考え方が日本にはありますね。こういう言葉に触れると、私はいつもボーリングというスポーツを連想します。

ボーリングにはもちろん技術や体力が必要ですが、私が特に必要だと思っているのは精神力です。娯楽としてボーリングをやるときさえ、第一フレームは大切にしようと思って取り組みます。

第一フレームからストライクやスペアーが取れたりすると、第二フレームにますます期待をします。「よし、第二フレームも！」とやる気満々で投げようと思います。たとえミスしたとしても、第三フレームには挽回まひかいしようという思いで投げるものです。

しかし、第一フレームからミスが出ると、「あーっ、だめだ」という気もちが一気に押し寄せます。「幸先悪い」という言葉があるように、二回目三回目に悪い結果が出た時よりも、落胆の気もちがとてつもなく大きいのが一回目です。その一回目のミスが全てを象徴しているかのように思えてしまい、途中から立ち直ることは非常に難しくなってきました。つまり、同じミスでも、最初に生まれたものか、途中に生まれたものかで、人間の精神状態が大きく変わってくるのです。

以前紹介した『徒然草つれづれ草』に、「三本の矢」という話があります。そこには、次のような内容が書かれています。

「初心の人、二つの矢をもつことなけれ。後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。毎度、ただ、得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」

初心者は、二本の矢をもつて的に向かつてはいけけない。後の二本の矢をあてにして、最初の矢をいい加減に射る気もちが生まれるから。矢を射るたびに、当たる当たらないと考えるのではなく、この一本の矢で(的を)射ようと思いなさい。これが訳です。

初心者にあてはまる話として読むのではなく、弱さをもった人間全員にあてはまる話として読んでください。確かにその通りですよ。ね。複数本の矢があれば、最初の矢が絶対おろそかになります。結局、(的を射たいという)望みを後の矢で果たそうとしても、よい結果が生まれるとは限りません。それだったら、最初の矢で的を射ようと思って取り組むことが大切です。

卒業や進級をしたら頑張ろうというのは、二本目三本目での射ようとしているのと同じかもしれないですね。むしろ、それらに向けて、一年のスタートの今を大切にしていって取り組むことが大切です。今の頑張りが助走になって、四月からの新年度には、より大きくジャンプできるかもしれませんからね。

(一月十一日記)

